



TITLE:

朱子語類讀書法篇譯注(一)

AUTHOR(S):

與膳, 宏; 木津, 祐子; 齋藤, 希史

---

CITATION:

與膳, 宏 ...[et al]. 朱子語類讀書法篇譯注(一). 中國文學報 1994, 48: 109-138

ISSUE DATE:

1994-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177557>

RIGHT:

## 朱子語類讀書法篇譯注 (一)

興膳 宏

京都大學

木津 祐子

同志社女子大學

齋藤 希史

京都大學

### 前 言

讀書法篇は、『朱子語類』卷十・十一の二卷を占める、朱熹の學問論である。朱熹において、學問とは何よりもまず「理を窮める」ことであり、「窮理の要」が讀書に存すると考えられている。したがって、學問する者にとって讀書はきわめて重要な意味を持つことではあるが、同時に讀書はあくまでも學問の一階梯であって、それ自體が目的化されるべきではない。本篇の冒頭で、まずいきなり「讀書乃學者第二事」と述べられるのは、そのためである（本文

朱子語類讀書法篇譯注 (一) (興膳・木津・齋藤)

1注参照)。しかし、讀書をぬきにしては學問はありえないということも、本篇のはしばしでくり返し説かれるところである。讀書法卷頭の各條では、「道理」を會得する、もしくは自らの内に備わる道理を引き出し體得する學問を第一義としつつ、その手段としての讀書の役割を明らかにしている。

また朱熹が「讀書」というとき、それは廣く書物一般を意味するのではなく、もっぱら經書を意識の中心に置いていっていることにも注意を拂う必要がある。經書を窮めて理を明らかにしたのち、始めて史書や諸子の書に進むべきことが、上篇の後半でしきりに述べられる。詩文は、その際、殘念ながら直接視野には入ってこないようである。詩文を論じた論文篇上下が『語類』百四十卷の最後に置かれていることから、朱熹の學問觀に占める詩文の位置がそれとなく察せられる。

さらに經書を読むに際しても、段階を踏むべきだと朱熹は考える。すなわちまず四書を、『大學』『論語』『孟子』『中庸』の順序で讀んだあと、五經を一つずつ讀み進んで

いくのがよいとされる。四書を上記のような順序で読むべきことは程子の見解を繼ぐが、それは初學にとつての難易淺深の度合いによるのであって、四書の間で優劣があるというわけではない。『語類』の中で、四書各書を論じた篇の順序がまさに上記の通りであることに注意すべきであらう。

讀書法篇には、あらまし以上のような前提の下に讀書の學が展開されるのであるが、ぜひ斷っておかねばならないのは、朱熹の學問論は決してこの章にのみ繰り廣げられるわけではなく、先後する諸篇とおのずから有機的な關連を有していることである。ことに卷百十三から卷百二十一に至る訓門人の篇には、内容的にもほとんど同趣旨の記述が頻出する。それはさまざまな機會に語られた朱熹のことを、時を経て内容上から分類編集するに當って、一つの篇では括りきれない部分が多くあったという事實を物語っている。いま譯注を施すに際しては、可能な限り關連する他の篇のことを檢索して、『朱子語類』全書の中での位置づけを明らかにするよう心がけた。

讀書法に關係の深い書として指摘しておく必要のあるのは、宋の張洪・齊熙共編による『朱子讀書法』四卷のことである。これはもと朱熹の門人輔廣の編集した原著を、張・齊兩氏が増補の上、排比綴輯して上下二卷の書に編んだもので、のち『永樂大典』に收録された元末のテキストをもとに四卷に再編された書が、いま四庫全書子部儒家類に收められている。因みにその原著者輔廣は、田中謙二「朱門弟子師事年攷」(『東方學報』第四十四冊、一九七三年)によれば、朱熹の最晩年に至るまで三次にわたる師事の時期を持った門弟であつた。同書は當然ながら讀書法篇との間に重なる記述が多くあり、また『語類』諸本を檢討する中で、『語類』本文の成立に關して示唆を與える箇所も少なくない。同書では、收録内容を「循序漸進」、「熟讀精思」、「虚心涵泳」、「切己體察」、「著緊用力」、「居敬持志」の六類に分かつているが、これは朱子の讀書法を系統立てて理解するために大きなヒントを提供しているといつてよからう。

『語類』が中國思想研究のために大きな意義を有するこ

とはいってもないが、私ども文學研究の徒は、朱熹が學問の要諦をいかなることばでいかに語っているかということに、朱熹の思想に對すると同様の、あるいはむしろそれ以上の興味を覺える。たとえば朱熹は讀書の方法を説くために、多様な譬喩を用いるが、それらは戦争や裁判から料理・飲酒・煎藥・掃除等に至るまできわめて多彩であり、人を厭きさせることがない。饒舌な朱熹先生の傍らに侍して、その教に堪能したはずの門生たちとともに、私どももまた文字化された彼の語り口を通して、ことばによる説得の妙味を味わうことができる。

この譯注は、王星賢點校『朱子語類』（理學叢書、中華書局刊、一九八六年三月第一版）を底本としたが、次の諸本によって校訂を加えた。また句讀は必ずしも底本によってはいいない。

- 1 明成化九年刊本（中文出版社影印本）
- 2 朝鮮古寫本（中文出版社影印本）
- 3 朝鮮古活字本（京都大學文學部所藏）
- 4 朝鮮刊本（一七七一年刊影印本）

朱子語類讀書法篇譯注（）（興膳・木津・齊藤）

## 5 江戸寛文八年刊本（京都大學文學部所藏）

なお讀書法篇については、これまでに三浦國雄氏による紹介が『朱子集』（中國文明選<sup>3</sup>、一九七六年、朝日新聞社刊）および『朱子』（人類の知的遺産19、一九七九年、講談社刊）にある。また、Daniel K. Gardner: *LEARNING TO BE A SAGE. Selections from the Conversations of Master Chu, Arranged Topically.* (University of California Press, 1990) には、讀書法篇の抄譯が載せられている。語彙索引としては、塩見邦彦編『朱子語類「口語語彙」索引』（一九九二年、中文出版社）がある。いずれの業績から多大の啓發を受けた。また一般讀者を對象とした華譯としては、陳仁華『朱子讀書法』（一九九一年、遠流出版事業股份有限公司）がある。『語類』各條の筆録者に關しては、田中謙二氏の前記「朱門弟子師事年攷」及び「朱門弟子師事年攷續」（『東方學報』第四八冊、一九七五年）に詳細な考證があり、この譯注ではすべてをそれに委ねて、最少限の紹介のみにとどめた。なお門人に關する考證には、他に陳榮捷『朱子門人』（一九八二年、臺灣學生書局）がある。

この譯注は、京都大學大學院における演習の成果に基づいて作成された。木津が演習擔當者の札記を参照して新たに草した原案に興膳が加筆し、さらに齋藤を交えた執筆者の三人の討議による推敲を加えて、稿を成した。演習の分擔者として資料を提供された森賀一恵、湯淺陽子、黃舒眉、氏岡眞士、大野圭介の諸氏に感謝する。

(興膳宏記)

# 凡 例

校勘では、まず底本と異同のあるテキスト名を挙げ、次に↓によって異同の箇所を示す。A↓Bとあれば、底本でAに作る箇所を、某本ではBに作ることを示す。異同のない場合は特に注記しない。

各注(一)内の漢數字は『朱子語類』(理學叢書本)の巻数を、洋數字はそのページ数を示す。

筆録者についての説明は、初出の箇所にのみ記す。

『朱子讀書法』とは、四庫全書本『朱子讀書法』四巻を指す。

## 卷十 學四 讀書法上

### 1 讀書乃學者第二事。方子。

讀書とは學問する者にとって二次的なことだ。[李方子]

(校勘) 朝鮮古寫本「讀書法下」(卷二) 所收 方子↓方子○  
以下論書所以明此心之理讀之要切已受用

(注) この條から第3條までで、朱子は、「理を窮める」ための學問を第一義におきつつ、その手段としての讀書を二義的なものと捉える所以を明らかにする。この考え方が端的に表現されている箇所を幾つか挙げておこう。「戰國漢唐諸子」(一三七・三七三)の「韓文公第一義是去學文字、第二義方去窮究道理、所以看得不親切。如云、其行己不敢有愧於道。他本只是學文、其行己但不敢有愧於道爾。把這箇做第二義、似此樣處甚多」、「訓門人六」(一一八・二八五)の「楊子順・楊至之・趙唐卿辭歸、請教。先生曰、學不是讀書。然不讀書、又不知所以爲學之道」、「訓門人八」(一二〇・二八九)の「語泉州趙公曰、學固不在乎讀書、然不讀書、則義理無由明」など。また、次に引く『朱文公文集』四三「答陳明仲」にも、その考えの一端が表れている。「子路非謂不學而可以爲政、但謂爲學不必讀書耳。上古未有文字之時、學者固無書可讀、而中人以上、固有不待讀書而自得者。但自聖賢有作、則道之載於經者、詳矣。雖孔子之聖、不能離是以爲學也。捨是不求、而欲以政學、既失之矣、況又責之中材之人乎。然子路使子羔爲宰、本意未必及此、但因夫子之言而託此以自解耳、故夫子以爲佞自惡之。」

(記錄者) 李方子 字は公晦、號は果齋、邵武の人。「朱門弟子師事年攷」(以下「師事年攷」と略稱) 155・「師事年攷續」337。

2 讀書已是第二義。蓋人生、道理合下完具、所以要讀書者、蓋是未曾經歷見許多。聖人是經歷見得許多、所以寫在冊上與人看。而今讀書只是要見得許多道理。及理會得了、又皆是自家合下元有底、不是外面旋添得來。至。

讀書は第二義的なものだ。というのは、人は生まれながら道理を具えているもので、讀書せねばならないのは、經驗が不足しているからである。聖人は多くのことを經驗して知っているので、書物にそれを書き記して人に讀ませたのである。いま讀書するのは、もっぱら多くの道理を理解せんがためである。會得してしまふと、それらの道理はすべて自分の中にもともと備わっていて、外からにわかにつけ加わって來たものではないことがわかる。〔楊至〕

(校勘) 朝鮮古寫本 人生↓人人生 合下完具↓合下皆完具  
見許多↓見得許多 至↓從周

(注) 第一義・第二義とは、例えば、『大乘入楞伽經』「集一切佛法品」に「第一義者是聖樂處因言而入、非即是言。第一義是聖智內自證境、非言語分別智境。言語分別不能顯示」と見えるように、もと佛教用語である。朱子はそれを現代での用例にも通ずる廣い意味で用いる。たとえば、「持守」(二・210)に

朱子語類讀書法篇譯注(一)(興膳・木津・齋藤)

は「敬字工夫、乃聖門第一義、徹頭徹尾、不可頃刻間斷。」とあり、また「大學二 經下」(二五・38)では、「曹問『如何是第一義。』曰『如『爲人君、止於仁、爲人臣、止於敬、爲人子、止於孝』之類、決定著恁地、不恁地便不得。又如入朝、須著進君子、退小人、這是第一義。有功決定著賞、有罪決定著誅。更無小人可用之理、更無包含小人之理。惟見得不破、便道小人不可去、也有可用之理。這都是第二義、第三義、如何會好。若事窮得盡道理、事事占得第一義、做甚麼剛方正大。且如爲學、決定是要做聖賢、這是第一義、便漸漸有進步處。」と述べる。

「理會」は、「かまいつける」「分別する」「取り組む」などの意で、田中謙二「朱子語類外任篇譯注(一)」(『東洋史研究』二八一、一九七二)では、「宋元期にこの語の含意はかなり幅広い」と注する。「自論爲學工夫」(一〇四・264)に見える「先生因與朋友言及易、曰、易非學者之急務也。某平生也費了些精神理會易與詩、然其得力則未若語孟之多也。易與詩中所得、似鷄肋焉。」や、「訓門人」(一一三・274)の「須是理會來、理會去、理會得意思到、似被膠漆粘住時、方是長進也。」などもこの義に近い。

「合下」は左に例を挙げておいたが、「原來」または「すぐさま」の意に解しうる語で、『語類』の中に頻用される。ここでの意味は「原來」とするのがふさわしい。田中謙二『董西廂』にみえる俗語の助字(『東方學報』一八、一九五〇、いま『ことばと文學』汲古書院、一九九三、所收)を参照。

人物之生、其賦形偏正、固自合下不同。(「性理一」四・56)  
大學之道、在明明德、謂人合下、便有此明德。(「大學二」經下)一五・289)

「旋添」は「旋+動詞」の形になっており、その場合の「旋」は「臨時に、にわかに、たちまち」する」という意をもつ。左に、『語類』での用例を挙げておく。

不成只這裏打瞌睡懷憶、等有私欲來時、旋捉來克。(「論語二十三」顏淵篇上)四一・104)

德既在己、則以此行之耳、不待外面勉強旋做。(「程子之書三」九七・2490)

なお、『朱子讀書法』一「綱領」に「人之生道理合下皆完具、所以要讀書者蓋是未曾經歷見得許多。聖人是經歷見得許多、所以寫在冊子上與人看。而今讀書只是要見得許多道理。」とある。(記錄者) 楊至 字は至之、泉州晉江の人。「師事年攷」166。

3 學問、就自家身上切要處理會方是、那讀書底已是第二義。自家身上道理都具、不曾外面添得來。然聖人教人、須要讀這書時、蓋爲自家雖有這道理、須是經歷過、方得。聖人說底、是他曾經歷過來。佐。

學問は、自分自身の切實な所に引きつけて取り組んでこそ良いのであり、讀書などは第二義である。自分の身に道

理はすべて備わっていて、決して外から付け加わるわけではない。しかし、聖人が人に書物を讀めと言うのは、自分に道理がもともと備わってはいても、經驗してこそ會得できるからである。聖人が言うことは、彼が經驗してきたことである。〔蕭佐〕

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

(注) 「切要」は「切實」の意。

(記錄者) 蕭佐 字は定夫、潭洲湘鄉縣の人。「師事年攷續」283。

4 學問、無賢愚、無小大、無貴賤、自是人合理會底事。且如聖賢不生、無許多書冊、無許多發明、不成不去理會。也只當理會。今有聖賢言語、有許多文字、却不去做。師友只是發明得、人若不自向前、師友如何着得力。謙。

學問とは、賢愚、老若、貴賤の別なく、當然人が取り組まねばならないことである。たとえば聖賢が生まれず、多くの書物もなく、多くの眞理も明らかにはされていなくても、取り組まなくてよいことがあるうか。やはりやらねばならない。今は聖賢のことばや多くの書物があるのに、學

ぼうとしない。師友とは啓發し得る存在なのであって、人  
がもしも自分から進んで學ぼうとしなければ、彼らとてど  
うして役にたてようか。〔廖謙〕

〔校勘〕 朝鮮古活字本 向前↓句前

朝鮮古寫本 却不去做まで同じ。以下、底本では「訓門人四」  
（一一六・288）の、「生知之聖」で始まる條の「先止是致知」  
以下最後までがこれに續く。

〔注〕 「且如」は「例如」の意。「たとえば」。

「不成」は、「難道く不成」に同じ。「戰國漢唐諸子」（一  
三七・327a）の「安卿曰、博愛之謂仁等說、亦可見其無原頭處。  
曰、以博愛爲仁、則未有博愛以前、不成是無仁。」など。

「師友」の果たしうる役割については、「總論爲學之方」（八  
・156）に「師友之功、但能示以用工之實、不必費辭。使人知  
所適從、以入於坦易明白之域、可也。若泛爲端緒、使人迫切而  
自求之、適恐資學者之病。」と述べているのが参考となる。

「向前」は「積極的にする」の意。『語類』に頻出する語  
彙の一つ。

〔記錄者〕 廖謙 字は春伯、蕭佐と同じ湘潭縣の人。「師事年  
攷續」284。

5 爲學之道、聖賢教人、說得甚分曉。大抵學者讀書、務  
要窮究。「道問學」是大事。要識得道理去做人。大凡看書、

朱子語類讀書法篇譯注（）（興膳・木津・齋藤）

要看了又看、逐段・逐句・逐字理會、仍參諸解・傳、說教  
通透、使道理與自家心相肯、方得。讀書要自家道理浹透  
徹。杜元凱云「優而柔之、使自求之、使自趨之。若江海之  
浸、膏澤之潤、渙然冰釋、怡然理順、然後爲得也。」椿。

學問をおさめる道は、聖賢が人に教えてはつきりと説い  
ている。いったい學問する者は讀書する際、とことん究明  
しようと努めねばならない。「問學に道<sup>ミチ</sup>る」ことが重要で  
ある。道理を身につけつつ人間として成長していかなければ  
ならない。凡そ讀書というものは、讀んではまた讀み、段  
ごとに、句ごとに、文字ごとに取り組んで、さらに種々  
の解釋や傳を參考にして、教えにすっかり通曉し、道理を  
自分の心にじっくり納得させてこそ良いのである。讀書は  
自分に備わる道理を徹底的に浸透させることだ。杜元凱は  
「（學ぶ者は心を）ゆるやかにのびのびとさせ、（經文の意を）  
自ら求め、十分に飽きたりて（その深い内容に）自ら趨こう  
とする。大河や大海の水が浸み透り、雨のめぐみが潤し、  
さらりと水が溶けるように、素直に道理が納得できる。そ  
れでこそ會得したといえる」といつている。〔魏椿〕



(校勘) 朝鮮古寫本 缺

朝鮮古活字本 求之得之

(注) 「道問學」は『中庸』第二十七章に「大哉聖人之道、洋洋乎發育萬物、峻極于天、優優大哉、禮義三百威儀三千、待其人而後行。故曰、苟不至德、至道不凝焉、故君子尊德性而道問學、致廣大而盡精微、極高明而道中庸、溫故而知新、敦厚以崇禮。」とあり、その章句に「尊者、恭敬奉持之意。德性者、吾所受於天之正理。道、由也。(中略) 尊德性、所以存心而極乎道體之大也。道問學、所以致知而盡乎道體之細也。二者修德凝道之大端也。」と言う。なお、「道問學」については、「中庸三第二十七章」(六四・128)に詳しく議論される。

上引の章句のことばかりもわかるように、朱子は「尊德性」と「道問學」を「修德凝道之大端」と理解していたが、學問の課程では、「尊德性」よりも「道問學」により多くの努力を拂うべきだ、と考えていたようである。たとえば、『朱文公文集』五四「答項平父」にも「所喻曲折及陸國正語、三復爽然、所警於昏惰者爲厚矣。大抵子思以來教人之法、惟以尊德性・道問學兩事爲用力之要。今子靜所說、專是尊德性事。而熹平日所論、却是問學上多了。所以爲彼學者多持守可觀、而看得義理全不子細、又別說一種杜撰道理、遮蓋不肯放下。而熹自覺雖於義理上不敢亂說、却於緊要爲己人上多不得力。今當反身用力、去短集長、庶幾不墮一邊耳。」と論じられる。

「浹治」は古くは『漢書』禮樂志に「於是教化浹治、民用和

睦」と用例が見える語で、程伊川の哲學において常用される。朱子も程子の思想とつながる部分でしばしばこの語を用いている。「讀書法下」(一一・178)でも「不若先涵養本原、且將已熟底義理玩味、待其浹治、然後先看書、便自知。」とあるが、さらに「論語二學而篇上」(二〇・448)には程伊川の「時復思繹、浹治於中、則說也」を受け、「浹治二字、宜子細看。凡於聖賢言語思量透徹、乃有所得。譬之浸物於水、水若未入、只是外面稍濕、裏面依前乾燥。必浸之久、則透內皆濕。程子言、時復思繹、浹治於中、則說也、極有深意。」と詳細に解説する。「杜元凱云：」は、杜預「春秋左氏傳序」の「左丘明受經於仲尼、……身爲國史、躬覽載籍、必廣記而備言之。其文緩、其旨遠、將令學者原始要終、尋其枝葉、究其所窮、優而柔之、使自求之、鑒而厭之、使自趨之。若江海之浸、膏澤之潤、渙然冰釋、怡然理順、然後爲得也。」をいったもの。杜預の文は、『左傳』の文章の特色について述べた箇所であるが、譯文は朱子のここでの本意に従った。

また「近思錄」二に、「伊川先生曰、古之學者、優柔厭厭、有先後次序。今之學者却只做一場話說、務高而已。常愛杜元凱語、若江海之浸、膏澤之潤、渙然冰釋、怡然理順、然後爲得也。今之學者往往以游夏爲小不足學。然游夏一言一事、却總是實。後之學者好高、如人游心於千里之外、然自身却只在此。」と見え、この杜預の文と「浹治」という語で代表しうる概念とが結びついて、程子以來朱子に緊密に受け繼がれたものと考ええるこ

とができよう。

こうした杜序のことはを自己の思想體系の中で解釋發展させた形跡は『語類』の各所で明らかにされる。たとえば、「訓門人四」(一一六・530)には、もっぱら學問における「涵泳」「浹洽」の重要性を論じ、同時に人にそのことを説く困難を述べた箇所があり、「訓門人九」(一二一・538)にもまったく同内容の條がみえるが、そこでは言う。「又一士友曰、先生涵泳之說、乃杜元凱優而柔之之意。曰、固是如此、亦不用如此解所謂涵泳說。者、只是子細讀書之異名也。」さらに、「自論爲學工夫」(二〇四・2616)にも以下のように論ずる。「伊川曰、時復思繹、浹洽於中、則說矣。某向來從師、一日間所聞說話、夜間如溫書一般、字字子細思量過。才有疑、明日又問。」(記錄者) 魏椿 字は天壽、建陽の人。「師事年攷續」326。

6 今讀書緊要、是要看聖人教人做工夫處是如何。如用藥治病、須看這病是如何發、合用何方治之。方中使何藥材、何者幾兩、何者幾分、如何炮、如何炙、如何製、如何切、如何煎、如何喫、只如此而已。淳。

いま讀書で重要なのは、聖人が人を教えるにあたって苦心したのは何處かを見極めることである。たとえば藥で病を癒すには、この病がどのようにして起こり、どのように

朱子語類讀書法篇譯注(一)(興膳・木津・齋藤)

處方すべきかを見ねばならない。つまり何の藥材を用い、何を幾兩、何を幾分、どのようにに熟し、どのようにに炙り、どのようにに調製し、どのようににぎざみ、どのようにに煎じ、どのようにに飲むか、ということであり、これに盡きるのである。「陳淳」

(校勘) 朝鮮古寫本 緊要是↓緊要敢是

(注) 修德の方法を論じる際に、藥の調合はよくたとえに用いられる。たとえば「大學五 或問下 傳五章」(一八・45)にも、「格物一章、前面說許多、便是藥料。它自有箇炮炙煖炙煖道理、這藥方可合、若不識箇炮炙煖炙煖道理、如何合得藥。藥方亦爲無用」と同じ喩えが見られる。

(記錄者) 陳淳(一一五三—一二二七) 字は安卿、號は北溪。漳州龍溪縣の人。「師事年攷」153。

7 讀書以觀聖賢之意、因聖賢之意、以觀自然之理。節。讀書して聖賢の言わんとすることを、聖賢の意に基づいて、自然の理を見るのだ。「甘節」

(記錄者) 甘節 字は吉甫・吉父、撫州臨川縣の人。「師事年攷續」304。

8 做好將聖人書讀、見得他意思如當面說話相似。賀孫。

きちんと聖人の著作を読めば、その考えがまるで面と向かつて話しているようにわかる。〔葉賀孫〕

〔校勘〕 朝鮮古寫本 讀書法下（卷一一）所收、異同なし。

〔記錄者〕 葉賀孫 字は味道。括蒼の人。〔師事年攷續〕336。

9 聖賢之言、須常將來眼頭過、口頭轉、心頭運。方子。

聖賢の言は、常に取り出して目にし、口に唱え、心に運らさねばならない。〔李方子〕

〔校勘〕 朝鮮古寫本 缺

10 開卷便有與聖賢不相似處、豈可不自鞭策。祖道。

書物を開くや自分が聖賢と似ても似つかぬところがあるのに、どうして自らを鞭打たずにおれようか。〔曾祖道〕

〔記錄者〕 曾祖道 字は擇之・宅之、廬陵の人。〔師事年攷〕169。

11 聖人言語、一重又一重、須入深去看。若只要皮膚、便有差錯。須深沈、方有得。從周。

聖賢のことばは、一層また一層と深いところに入って讀まねばならない。もしも上っ面だけに止まっておれば間違

いを生む。深く沈思して始めてわかるのである。〔寶從周〕

〔校勘〕 朝鮮古寫本 「讀書法下」（卷一一）所收 該條の後に「夜來所説、是終身規模、不可便要使有安頓」と續く。

〔注〕 續く第12條とともに、表層的な學問をいましめる條。

「深沈」は「語類」の他の箇所では、「沈潜」「深沈潜思」「深潜沈粹」などの形で表現されるものと同じ。たとえば、「訓門人二」（一一四・376）の「學者理會道理、當深沈潜思」など。また、「讀書法上」の第64條にも、「學者貪做工夫、便看得義理不精。讀書須是子細、逐句逐字要見着落。……若年齒尚晚、却須擇要用功、讀一書、便覺後來難得工夫再去理會。須沈潜玩索、究極至處、可也。」とみえる。

さて、この條とまったく同じ趣旨のことばが、「訓門人二」（一一四・376）に、やはり從周への朱子の訓として以下の通り記録されている。「聖人言語、一重又一重、須入深處看。若只見皮膚、便有差錯。須深沈、方有得。夜來所説、是終身規模、不可便要使、便有安頓。」恐らく、この部分が本條に先立つ原型であったのではなからうか。さらに、關連する表現として、「讀書法上」第80條（一〇・176）に「須是今日去了一重、又見得一重。明日又去了一重、又見得一重。去盡皮、方見肉、去盡肉、方見骨、去盡骨、方見髓。使粗心大氣不得。」とみえるのを舉げておこう。

〔記錄者〕 寶從周 字は文卿、丹陽の人。〔師事年攷〕166。

12 人看文字、只看得一重、更不去討他第二重。側。

人が文章を読むとき、單に表層を理解するのみで、ちつともその次の層を探ろうとはしない。〔沈側〕

〔校勘〕 朝鮮古寫本 讀書法下(卷一一)所收 異同なし

〔記錄者〕 沈側 字は莊仲、永嘉の人。〔師事年攷〕169。

13 讀書須是看着他那縫罅處、方尋得道理透徹。若不見得縫罅、無由入得。看見縫罅時、脈絡自開。植。

讀書するには、その切り込み口を見抜いてこそ、道理を奥深くまで尋ね當てることができる。もしも切り込み口が見つからなければ、(道理の奥に)入りようがない。切り込み口を見つけたならば、道筋はおのずと開けてくる。〔潘植〕

〔校勘〕 朝鮮古寫本 缺

〔注〕 「看着」の「着」は、現代語では「找着」という場合の「着」と同じで、動詞の示す動作の目的が達成されたことを表わす。

「縫罅」は隙間という意であるが、この條に始まって、第14條の「迎刃而解」、第15條の「庖丁解牛」と、同じ趣旨で文章を理解する要訣を論ずるのに基づき、この場合も、單なる隙間ではなく、開閉口、もしくは刃物の投入口、というニュアンスで譯出した。また、「讀書法下」(一一・184)にも次の通り、

朱子語類讀書法篇譯注(一)(興膳・木津・齊藤)

同趣旨の議論が見える。「看文字、且依本句、不要添字。那裏元有縫罅、如合子相似、自家只去扶開。」

なお、『朱子讀書法』四「虛心涵泳」に引かれる「答杜貫道書」には、「讀書課程甚善、但思慮亦不可過苦。但虛心游意、時時玩索、久之、當自見縫罅意味也」とある。

〔記錄者〕 潘植 字は立之、福州懷安縣の人。〔師事年攷續〕333。

14 文字大節目痛理會三五處、後當迎刃而解。學者所患、在於輕浮、不沈着痛快。方子。

文章の大きな節目を數箇所徹底的に理解すれば、その後はずんなりと理解できるはずだ。學問する者の悩みは、腰がすわらず、落ちついて思ひ切りよくなれないことだ。

〔李方子〕

〔校勘〕 朝鮮古寫本 缺

〔注〕 「迎刃而解」は、『晉書』三四「杜預傳」の「昔樂毅藉濟西戰以并強齊、今兵威已振、譬如破竹、數節之後、皆迎刃而解、無復著手處也。」に基づく表現。

「大節目」は重要箇所の意味。「大學二 經下」(一五・312)に「大學一篇却是有兩箇大節目。物格・知思は一箇、誠意・修身は一箇。才過此二關了、則便可直行將去。」などの用例が見

える。

また、『朱子讀書法』一「熟讀精思」に、「文字大題目痛理會三五處、後當迎刃而解。」とある。

15 學者初看文字、只見得箇渾淪物事。久久看作三兩片、以至於十數片、方是長進。如庖丁解牛、目視無全牛、是也。人傑。

學問する者が初めて文章を読むときには、一塊りのぼんやりした物が見えるばかりだが、じっくり見ているうちに、二三の塊りに分かれて見え、やがて十數片に分かれて見えるようになる。それでこそ大きく進歩したことになる。たとえば、かの庖丁が牛を捌く時に、牛の全體は目に入らなくなるのが、これなのである。〔萬人傑〕

〔校勘〕 朝鮮古寫本 缺

〔注〕 「渾淪」は「混沌」に通ずる疊韻の語で『列子』天瑞に「太初者、氣之始也。太始者、形之始也。太素者、質之始也。氣形質具而未相離、故曰渾淪。渾淪者、言萬物相渾淪而未相離也。」と見える。ただし、宋元のころより、「全體」「一塊の物體」といった意味で用いられることが多くなってくる。朱子のこの例は明らかに本來の「渾淪」義をふまえつつも、次にあげ

る例などとともに、「一かたまりのもの」というニュアンスの濃いことばの用法と考えられる。

今人論理、只要包含一箇渾淪底意思、雖是直截兩物、亦強袞合說、正不必如此。〔歷代三〕一三六・324c)

如此、方見得這箇道理渾淪周遍、不偏枯、方見得所謂「天命之謂性」底全體。〔訓門人九〕一二一・283c)

「庖丁解牛」は、言うまでもなく『莊子』養生主に基づく表現。「庖丁爲文惠君解牛、……庖丁釋刀對曰、臣之所好者道也。進乎技矣。始臣之解牛時、所見無非牛者。三年之後、未嘗見全牛也。方今之時、臣以神遇、而不以目視。官知止而神欲行。依乎天理、批大郤、導大窾、因其固然。技經肯綮之未嘗、而況大軋乎。良庖歲更刀、割也。族庖月更刀、折也。今臣之刀十九年矣。所解數千牛矣。而刀刃若新發於硯。彼節者有間、而刀刃者無厚。以無厚入有間、恢恢乎其於遊刃必有餘地矣。是以十九年而刀刃若新發於硯。」この部分について、朱子自身は「莊子書」

(一二五・300c)に、「因論庖丁解牛一段、至恢恢乎其有餘地。曰、理之得名以此。目中所見無全牛、熟」と語っている。また、『近思錄』卷一一に横渠の言で「……聖人之明、直若庖丁之解牛、皆知其隙、刃投餘地、無全牛矣。人之材足以有爲、但以其不由於誠、則不盡其材、若曰便率而爲之、則豈有由誠哉。」とあり、それに朱子は、「嘗見橫渠簡與人、謂其子日來誦書不熟、教他熟誦、盡其誠與材。」と注を付けている。

〔記錄者〕 萬人傑 字は正淳、興國軍大冶縣の人。「師事年攷

續」289°。

16 讀書、須是窮究道理徹底。如人之食、嚼得爛、方可嚥下、然後有補。紀。

讀書するには、必ず道理を徹底的にきかねばならない。

ちようど人がものを食べるのに、よく噛んでやっと飲み込むことができ、しかるのちに滋養となるようなものである。

〔李杞〕

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

(注) 讀書において道理を追求することを飲食にたとえるのは数多いが、第12條でも引いた、「讀書法上」第64條(一〇・128)の該當箇所後に次のように續くのが、同趣旨のものとして參考となろう。「……蓋天下義理只有一箇是與非而已。是便是是、非便是非。既有着落、雖不再讀、自然道理浹洽、省記不忘。譬如飲食、從容咀嚼、其味必長。大嚼大咽、終不知味也。」

(記錄者) 李杞 字は良仲、號は木川、平江の人。「師事年致續」279°。

17 看文字、須逐字看得無去處。譬如前後門塞定、更去不得、方始是。從周。

文章を読むには、一字一字もそれ以上行けない所まで

朱子語類讀書法篇譯注(一)(興膳・木津・齊藤)

つきつめて讀まねばならない。あたかも前後の門がしっかりと閉まっいて、もう何處にも行きようがないようであつてこそよいと言える。〔寶從周〕

(校勘) 朝鮮古寫本 「讀書法下」(卷一二)所收 異同なし

(注) 「方始」は「方」に同じ。

この條から19條までは、雜念を取り拂い、ぎりぎりのところまで努力する必要性を主張するが、同様の趣旨のことは「訓門人三」(一一五・2771)にも萬人傑への訓語として以下のような語が記錄される。「人傑將行、請數。先生曰、平日工夫、須是做到極時、四邊皆黑、無路可入、方是有長進處、大疑則可大進。若自覺有些長進、便道我已到了、是未足以爲大進也。顏子仰高鑽堅、瞻前忽後、及至雖欲從之、末由也已、直是無去處、至此、可以語進矣。」

18 關了門、閉了戶、把斷了四路頭、此正讀書時也。道夫。

門をかけ、扉を閉ざし、四方の道を塞いでしまふ、これこそ讀書する時である。〔楊道夫〕

(注) 前條とともにここでは學問に専心するため退路を斷つことの重要性を説く。この發想は、これらの他にも、「訓門人九」(一一一・2826)の「學者悠悠是大病、今覺諸公都是進寸退尺、每日理會些小文義、都輕輕地拂過、不曾動得皮毛上。這箇道理

規模大、體面闊、須是四面包括、方無走處。今只從一面去、又不曾著力、如何可過。」などにあらわれている。なお、この條とまったく同じ文章が、『朱子讀書法』一「熟讀精思」に見える。

「把斷」は、『漢語大詞典』では、汪元量「越州歌」三の「官司把斷西興渡、要奪漁船作戰船」を例に擧げて「把住」「占盡」という語義をあてる。關所や渡しなどを「占領する」「しっかりと把握する」などの意味で解釋しうる。

(記録者) 楊道夫 字は仲思・仲愚、建寧府浦城縣の人。「師事年攷」163。

# 19 學者只知觀書、都不知有四邊、方始有味。啓。

學問する者はただ書物を読むことに徹して、周圍のことをまったく氣に留めないようであつてこそ、味わいが出てくるものである。「黃螢」

(注) 「四邊」は「周圍」の意。「訓門人」(一一四・2766)に「當如射者、專心致志、只看紅心。若看紅心、又覷四邊、必不能中。」と見える。

(記録者) 黃螢(一一四七～一二二二) 字は子耕、號は復齋。隆興府分寧縣の人。「師事年攷」169。

# 20 學者讀書、須是於無味處當致思焉。至於羣疑竝興、寢

食俱廢、乃能驟進。因歎、驟進二字、最下得好。須是如此。若進得些子、或進或退、若存若亡、不濟事。如用兵相殺、爭得些兒小可一二十里地、也不濟事。須大殺一番、方是善勝。爲學之要、亦是如此。賀孫。

「學問する者が讀書するときには、面白みのないところを考えを集中せねばならない。種々の疑問が並び生じ、寢食も忘れるようになってこそ、驟進する(飛躍的に進歩すること)ができる。」そこで嘆息しておっしゃった。『驟進』

の二字は言い得て妙だ、(學問は)こうでなくてはならない。少し進んだだけで、進んだり退いたり、有るような無いようなことでは、何にもならない。たとえば、いくさで攻めこむのに、僅か十里二十里の土地を勝ち取ったところで、何にもならない。全力で攻めたててこそ、首尾よく勝利できるのだ。學問の要點も、これと同じだ。」「葉賀孫」

(校勘) 朝鮮古寫本 「讀書法下」(卷一一) 所收 異同なし

(注) 「寢食俱廢」に關わる表現は、『總論爲學之方』(八・134)に「學者做工夫、當忘寢食做一上、使得些入處、自後方滋味接續。浮浮沈沈、半上落下、不濟得事。」にも明らかのように、徹底的に努力せねばならぬ、という文脈での比喩に用い

られる。また、『朱子讀書法』一「熟讀精思」には、「羣疑竝興、寢食俱廢、始謂然而有見也。」とある。

「或進或退、若存若亡」は、『老子』第四十一章に「上士聞道、勤而行之。中士聞道、若存若亡。下士聞道、大咲之。不咲不足以爲道。故建言有之、明道若昧、進道若退、夷道若類」とあるのをういた表現であるが、のらりくらりとした學問をすることを否定し、進むときは猛然と集中的な努力をはらって一氣に進まねばならぬ、という趣旨で、『語類』の他所にもよく見られる。たとえば、「訓門人九」（一一・2917）に、「讀書須是成誦、方精熟。今所以記不得、說不去、心下若存若亡、皆是不精不熟之患。」とあり、また「訓門人九」（一一・2924）には、學生たちに漫然と學ぶことをきつく戒める訓語として、

「……今吾人學問、是大小大事。却全若存若亡、更不著緊用力、反不如他人做沒要緊底事、可謂倒置、諸公切宜勉之。」と記錄されるのも、同じ文脈の中で捉えることができる。

「不濟事」は口語で、「役に立たない」「ものにならない」の意味。「濟事」は『左傳』成公六年に「聖人與衆同欲、是以濟事」と古くからあることばであるが、『語類』での用例は、すべて否定形または反語で用いられる。

「小可」は「小小」に同じ。わずかの意。

この條では、讀書での集中的、徹底的な努力を戰爭にたとえている。同趣旨での譬えは、「訓門人四」（一一・2903）の「理會一件物、須是徹頭徹尾、全文記得、始是如此、中間是如此

此、如此謂之是、如此謂之非。須是理會教透徹、無些子疑滯、方得。若只是如此輕輕拂過、是濟甚事。如兩軍廝殺、兩邊播起鼓了、只得拌命進前、有死無二、方有箇生路、更不容放漫。若纔攻慢、便被他殺了。」など。

21 看文字、須大段着精彩看、聳起精神、樹起筋骨、不要困。如有刀劍在後一般。就一段中、須要透。擊其首則尾應、擊其尾則首應、方始是。不可按冊子便在、掩了冊子便忘却、看注時便忘了正文、看正文又忘了注。須這一段透了、方看後板。淳。

文章を読むには、大いに張りつめた氣分で讀まねばならない。氣持を奮い立たせ、背筋をしゃきとさせ、だらけではないけない。まるで刀が背後にあるかのようにするのだ。一段ごとに、徹底して理解すること。頭を打てば尾が反應し、尾を打てば頭が反應するというふうになってこそよい。書物を手にしている時には覚えていても、書物を閉じればすぐ忘れてしまったり、注を読む時には本文を忘れ、本文を読む時には注を忘れてしまうようなことではないけない。一つの段をすっかり理解してから、次の頁を讀むようにす



べきだ。〔陳淳〕

(校勘) 朝鮮古寫本 「讀書法下」(卷二) 所收 筋↓筋  
在↓是

(注) 「大段」は、副詞。「非常に」の意。

「精彩」は辭書的な意味で言うなら、「事物のすぐれて良いこと」となり、『漢語大詞典』にも「形容事物佳妙出色」として『朱子語類』での用例を擧げている。ところが、『語類』での幾つかの用例を確認してみると、單に「すぐれている」だけではなく、「力強く精神状態が昂揚しているさま」を形容すると捉える方がよりふさわしいように思われる。まさに日本語で「精彩がある」と言う場合の語感に近い。本條の例は「着十精彩」という形であるだけに、より明瞭にそのことを表していると考えてよい。また、同様の例では、「訓門人五」(一一七・281)の「這道理不是如堆金積寶在這裏、便把分付與人去、亦只是一箇頭、教人自去討。討得便是自底、討不得也無奈何。須是自著力、著些精彩去做、容易不得。」や、「訓門人八」(一二〇・280)の「語泉州趙公曰、學故不在乎讀書、則義理無由明要之、無事不要理會、無書不要讀。若不讀這一件書、便闕這一事道理。要他底、須著些精彩方得、然泛泛做又不得。」が挙げられよう。これは、『語類』の他の箇所を解釋する上でも、留意すべきことがある。

「擊其首則尾應」は『孫子』一一「九地」に「故善用兵、譬如率然、率然者常山之蛇也。擊其首、則尾至、擊其尾、則首至、擊

其中則首尾俱至。」にもとづく。

後半の主張に關しては「訓門人九」(二二・291)に次のような同趣旨のことばがある。「一學者患記文字不起。先生曰、只是不熟、不曾玩味入心、但守得冊子上言語、所以見冊子時記得、纔放下便忘了。」

22 看文字、須要入在裏面、猛滾一番。要透徹、方能得脫離。若只畧畧地看過、恐終久不能得脫離、此心又自不能放下也。時舉。

文章を読むときには、内に入り込んで猛然と格闘せねばならない。すっかり理解してこそ離れることができる。もしいい加減に読み飛ばしていたら、ずっと離れることはできないだろうし、心の方でもおちつかないだろう。

〔潘時舉〕

(校勘) 朝鮮古寫本 須要入在裏面↓須入裏面 恐終久不能得脫離↓終久不能脫離 さらに、該條の後に、底本では「讀書法下」の第17條と同じ内容の言(多少の異同あり)が續く。

(注) 「猛滾一番」の「滾」は『語類』の中で多彩なニュアンスをもつて使われる、生き生きとしたことばであるが、ここでは、次に擧げる「孟子三 公孫丑上之下」(五三・138)の例のような、上へ下へとたぎりながら生産する氣を描寫する表

現に倣い、學問の場面で猛然と格闘する様子を形容する。『天地以生物爲心』。譬如甄蒸飯、氣從下面發到上面、又滾下、只管在裏面滾、便蒸得熟。天地只是包許多氣在這裏無出處、滾一番、便生一番物。」

この條の「須要入在裏面」を「須入裏面」と作るのみで他はまったく同じ條が、『朱子讀書法』一「熟讀精思」に見える。

23 人言讀書當從容玩味、此乃自怠之一說。若是讀此書未曉道理、雖不可急迫、亦不放下、猶可也。若徜徉終日、謂之從容、却無做工夫處。譬之煎藥、須是以大火煮滾、然後以慢火養之、却不妨。人傑。

讀書はゆったりと味わうべきだ、と人は言うが、これは自分を怠けさせる口實の一つだ。ある書物を読んで道理がまだ分からないうちは、焦ってはいけなが、手放しもしないということなら、まだよからう。終日ぶらぶらしているのをゆったりと言うのであれば、何ら努力していないに等しい。藥を煎じること譬えれば、まず強火でぐつぐつ煮、そのあと弱火でじっくり煮詰めれば、よいようなものだ。〔萬人傑〕

〔校勘〕 朝鮮古寫本 「讀書法下」(卷二一) 所收

朱子語類讀書法篇譯注(一)(興膳・木津・齋藤)

(注) 「從容」ということばにまつわり、それを怠惰の言い譯にしてはいけな、と訓<sup>レ</sup>える條。ここで繰り返される「從容」は『莊子』秋水の「鱖魚出遊從容、是魚之樂也」で言うような「ゆったりとした心理狀態」を指すのであるが、別に『中庸』第二十章に見える、「誠者不勉而中、不思而得、從容中道、聖人也。」をも踏まえる。「從容」は、朱子の思想では、道理に習熟する時の心のあり方であり、その考えは、『訓門人五』(一一七・283)の「雖未能從容、只是熟後便自會從容」からも讀みとれる。ところが、このような「焦らず書を読み、自然とそれに習熟するのを待つ」という學習態度を説く一方で、朱子はそれを怠けの口實とさせぬように、隨所でいましめのことばを發せずにはいられない。本條はその一つであらうし、また、「訓門人五」(一一七・283)では、「戒愼恐懼」(『中庸』第一章の「是故君子戒愼乎其所不睹、恐懼乎其所不聞」にもとづく)していたのでは道理は明らかにならない、という説の是非を弟子に問われた朱子は、「不如此、也不得。然也不須得將戒愼恐懼說得太重、也不是恁地驚恐。只是常常提撕、認得這物事、常常存得不失。……聖人『不勉而中、不思而得、從容中道』、亦只是此心常存、理常明、故能如此。……常謂人無有極則處、便是堯舜周孔、不成說我是從容中道、不要去戒愼恐懼。」と答へ、本條と同趣旨の箴戒を口にしている。

「急迫」は程子以來、學問を修める上での忌むべき態度とされた。「持守」(一一・205)では程伊川の語「學者須敬守此心、

不可急迫、當栽培深厚」を引き、それに續けて「栽、只如種得一物在此、但涵養持守之功繼續不已、是謂栽培深厚。如此而優游涵泳於其間、則浹洽而有以自得矣。苟急迫求之、則此心已自躁迫紛亂、只是私己而已、終不能優游涵泳以達於道。」と論ずる。

「徜徉」は「ぶらぶら」していることを形容する疊韻の語。

『楚辭』「惜誓」では「樂窮極而不厭兮、願從容處神明。……臨中國之衆人兮、託回輒乎尙羊。」と、「從容」とともに現れるが、その王逸注には「尙羊、遊戲也」とある。また、張衡「思立賦」にも「會帝軒之未歸兮、悵徜徉而延佇」と用例がみられるが、本條での用法は、より口語的なものである。

第6條でも用いられた藥の比喩がここにも用いられる。關連表現は、隨所に見られるが、ここでは「總論爲學之方」(八・138)の「譬如煎藥、先猛火煎、教百沸大滾、直至湧空出來、然後却可以慢火養之。」「訓門人三」(一一五・278)の「讀書要須耐煩、努力翻了巢穴。譬如煎藥、初煎時、須猛著火。待滾了、却退著、以慢火養之。讀書亦須如此。」を擧げておく。

また、ここで述べるような漫然と學問することの弊害は各所で述べられるが、詳細な検討は第43條に譲る。

24 須は一棒一條痕、一搥一掌血。看人文字、要當如此。

豈可忽畧。 簪。

棒で殴れば肉がさけ、びんたを張れば手は血でべっとり、

という具合に鍛えねば、人の文章を読むときは、かくあるべきだ。どうしておろそかにできようか。『黃簪』

(校勘) 朝鮮古寫本 「讀書法下」(卷一二) 所收

朝鮮古寫本・古活字本ともに「棒」を「搥」につくる。

(注) 「一棒一條痕、一搥一掌血」はもと禪語。『碧巖錄』八第七八則に「一棒一條痕、莫辜負山僧好。撞著磕著、還曾見德山臨濟麼」とある。また、『語類』では、「論語一六 述而篇」(三四・88)に「問、發憤忘食、樂以忘憂。曰、聖人全體極至、沒那不問不界底事。發憤便忘食、樂便忘憂、直恁地極至。大概聖人做事、如所謂一棒一條痕、一搥一掌血、直是恁地。」「訓門人三」(一一五・278)に「先生謂徐容父曰、爲學、須是裂破藩籬、痛底做去、所謂一杖一條痕、一搥一掌血。使之歷歷落落、分明開去、莫要含糊。」などと、「徹底的に行なう」意でしばしば用いられる。

25 看文字、須是如猛將用兵、直是鏖戰一陣、如酷吏治獄、直是推勘到底、決是不恕他、方得。 蓼孫。

文章を読むときには、猛將が軍隊を指揮して死に物狂いに戦うように、また、酷吏が訴訟を裁くとき容赦なく調べたてて、決して目こぼしをしないようにしてこそよいのである。『林蓼孫』

〔校勘〕 朝鮮古寫本 「讀書法下」(卷一一) 所收。看文字↓而今看文字

〔注〕 「鏖戰」は徹底的に戦う意。たとえば『唐書』『王翊傳』に「引兵三千、與賊鏖戰」とある。

〔記錄者〕 林夔孫 字は子武、福州古田縣の人。「師事年攷」180。

26 看文字、正如酷吏之用法深刻、都沒人情、直要做到底。若只恁地等閑看過了、有甚滋味。大凡文字有未曉處、須下死工夫、直要見得道理是自家底、方住。賜。

文章を読むのは、ちょうど酷吏が法律を嚴格に運用し、いささかの人情も排して、徹底的にやると同じだ。もしもこんなふうのにのんびりと読み過してしまえば、何の面白みがあるというのだ。およそ文章にまだ理解できぬところがあるうちは、ひたすらこつこつ努力すべきで、道理が我がものとして理解されるまでやるのだ。〔林賜〕

〔校勘〕 朝鮮古寫本 「讀書法下」(卷一一) 所收。方住↓方性

〔注〕 後半部分と同趣旨の言は、『朱子讀書法』一「熟讀精思」に、「大凡看文字、若有曉不得處、須著下死工夫、直要見得道

朱子語類讀書法篇譯注(一)(興膳・木津・齋藤)

理是自家底、方住。先生言此以告學者、其辭甚厲。」とある。

「死工夫」は、「一見無駄なように見える、苦しい基礎努力」。「直要方住」は口語で、「ひたすらこまでやる」という意味に該當する。

〔記錄者〕 林賜 字は聞一。「師事年攷續」290。

27 看文字如捉賊、須知道盜發處、自一文以上贓罪情節、都要勘出。若只描摸箇大綱、縱使知道此人是賊、却不知何處做賊。賜。

文章を読むのは、泥棒を捕まえるのに、盗みの現場を知り、一文以上の盗みの次第をすべて調べあげねばならないのと同じだ。もしも單に大筋をつかむだけなら、たとえこいつが泥棒であると分かって、どこで盗んだかわからない。〔林賜〕

〔校勘〕 朝鮮古寫本 「讀書法下」(卷一一) 所收。須知道盜發處↓須知盜發處

〔注〕 『朱子讀書法』一「熟讀精思」では、「看文字如捉賊、須於盜發處、自一文以上贓罪情節、都要勘出、莫描摸箇大綱、縱使知道此人是賊、却不知他在何處賊。」とある。

「贓罪」は、もと收賄罪を指す。蔡邕「太尉喬玄碑陰」に「公紀廢贓罪、致之于理」。盗んだ物品を「贓」とも言う。

「描摸」は「つかみ出す」の意。「程子之書三」(九七・280)に、「楊志仁問明道說話。曰、最難看。須是輕輕地挨傍它、描摸箇它意思、方得。若將來解、解不得。須是看得道理大段熟、方可看。」とある。

28 看文字、當如高緘大編、順風張帆、一日千里、方得。如今只纔離小港、便着淺了、濟甚事。文字不通、如此看。惲。

文章を読むのは、でっかい千石船が順風を帆にはらんで、一日に千里も走るようであってこそよい。小さな港を出たばかりで座礁してしまつては、何にもならない。文章がわからないのは、こんなふうに読んでいるからだ。「沈惲」

(校勘) 朝鮮古寫本 「讀書法下」(卷一一) 所收。

(注) ここでは、學問する際の、一氣に猛然と大きく進むことの重要性を、航海にたとえている。記録者の沈惲は浙江永嘉(今の温州)の人であり、また、「師事年攷」によれば、彼の師事期間は朱子が漳州にいた期間に重なっている。つまり、大海原へと波に乗る感覚がリアルに傳わる人と場を得た巧みな比喩と言えるであろう。航海を引き合いに出す例としては、「訓門人二」(二四・275)の「如今見得這道理了、到得進處、有用力慳實緊密者、進得快。有用力慢底、便進得鈍。何況不見

得這源頭道理、便緊密也徒然不濟事。何況慢慢地、便全然是空。如今拽轉亦快。如船遭逆風、吹向別處去、若得風飄轉、是這一載不問甚麼物色、一齊都拽轉。若不肯轉時、一齊都不轉。」や、「訓門人五」(二七・282)の「若恁地看道理淺了、不濟事。恰似撐船放淺處、不向深流、運動不得、須是運動游泳於其中。」などがある。

「緘」は、字書類を見ても、『朱子語類』のこの條が例に取られている程度で、極めて用例の少ない文字である。「編」については『廣韻』に「編、吳船」とあるので、「緘」が方言字である可能性もあろう。

29 讀書看義理、須是胸次放開、磊落明快、恁地去。第一不可先責效。纔責效、便有憂愁底意。只管如此、胸中便結聚一餅子不散。今且放置閑事、不要閑思量。只專心去玩味義理、便會心精。心精、便會熟。淳。

讀書して義理をさとるには、胸を廣げて大らかに明快に、読み進むべきである。決してまず効果を上げることが求めないこと。効果をねらうのではがっかりするだろう。そんなことでは、胸にしこりができて取れなくなってしまう。今はしばらく餘計なことは放っておいて、つまりぬことは

考えないようにせねばならない。ただ一心に義理の含意を味わうようにすれば、心が研ぎ澄まされてくる。心が研ぎ澄まされれば、習熟できる。〔陳淳〕

(注) まったく同趣旨の言が、徐寓への訓語として「訓門人三」(一一五・2779)に記録されている。「讀書看義理、須是開豁胸次、令磊落明快、恁地憂愁作甚地。亦不可先責效。才責效、便見有憂愁底意思、只管如此、胸中結聚一餅子不散。須是胸中寬閑、始得。而今且放置閑事、不要閑思量、只專心去玩味義理、便會心精、心精、便會熟。」

「第一不<sup>レ</sup>」は「け<sup>レ</sup>して<sup>レ</sup>するな」の意。「纔<sup>レ</sup>便」は「一<sup>レ</sup>便」に同じ。

30 讀書、放寬著心、道理自會出來。若憂愁迫切、道理終無緣得出來。

讀書するとき、心をゆったりと廣げていれば、道理はおのずとあらわれる。鬱ぎこんで思いつめていたのでは、道理はあらわれようがない。

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

(注) 『朱子讀書法』二「虛心涵泳」に、同じ條が見える。

31 讀書、須是知貫通處、東邊西邊、都觸着這關捩子、方

朱子語類讀書法篇譯注 (一) (興膳・木津・齋藤)

得。只認下着頭去做、莫要思前算後、自有至處。而今說已前不曾做得、又怕遲晚、又怕做不及、又怕那箇難、又怕性格遲鈍、又怕記不起、都是閑說。只認下着頭去做、莫問遲速、少間自有至處。既是已前不曾做得、今便用下工夫去補填。莫要瞻前顧後、思量東西。少間擔閣一生、不知年歲之老。憫。

讀書は「貫通する處」を知って、端から端まですべてこのかなめに繋がっていてこそ良い。ひたすら書物を讀むことに没頭し、あれこれあとさきのことを考えるな。そうすれば自然とわかってくる。これまでしたことがないとか、遅すぎないか、やっても間に合わないのではないかと恐れ、やれあれは難しいの、自分は資質が鈍いの、憶えられないのと心配しているのは、すべて無駄なことだ。ひたすら目の前の書物に没頭し、進み具合など氣に懸けなければ、そのうち自然とわかるようになる。もし以前にやったことがないのなら、いま努力して補うがよい。あちこち氣にしておあだこうだと考えてはいけない。そんなことでは、やがて一生を棒に振って、知らないうちに歳をとってしまう。

〔沈問〕

(校勘) 朝鮮古寫本 「讀書法下」(卷二) 所收。遅晩↓遅脱

朝鮮古活字本 擔閣↓檐閣

(注) 「貫通」は、古くは董仲舒『春秋繁露』正貫に「然後援天端、布流物、而貫通其理、則事變散其辭矣」とあるが、朱子がこゝで述べる内容は、『河南程子遺書』一八の「格物須物物格之、還只格一物而萬理皆知。曰、怎生便會通。若只格一物、便通衆理、雖顏子亦不敢如此道。須是今日格一件、明日又格一件、積習既多、然後脫然自有貫通處。」をふまえ、『語類』の中でも重要な修德態度として、繰り返し説かれる。また朱子自身は「貫通」を、「總論爲學之方」(八・136)に「貫通、是無所不通。」同(八・136)「學者工夫、但患不得其要。若是尋究得這箇道理、自然頭頭有箇着落、貫通浹洽、各有條理。如或不然則處處窒礙。學者常談、多說持守未得其要、不知持守甚底。說擴充、說體驗、說涵養、皆是揀好底言語做箇說話、必有實得力處方可。所謂要於本領上理會者、蓋緣如此。」のように解説する。また、「貫通」の類義語としては、「通貫」「洞貫」なども同様の文脈でしばしば登場する。

「關振子」は、『碧巖錄』一第一則の「雪竇恐怕人逐情見、所以撥轉關振子、出自己見解云、休相憶、清風匝地有何極。」について『碧巖集方語解』に「諸鈔ニ貫ノ事ナリト云ハ誤ナリ、關振ハカラクリノハゼナリ。通雅云、關振、機振也。廣記、唐

韓志和雕木、爲鸞鶴置機振于腹中、發之則飛。傳燈錄、黃檗謂牛頭尚不知向上關振子。蓋一義。」とあるのが参考になる。ここでは、からくりの關鍵部分という意味から「かなめ」と譯した。この語が、『語類』の中でも、そもそも『碧巖集方語解』に説明されるような「仕掛けの作用點」のような意味で使われていたことは、「詩二」(八一・216)に「如此讀將去、將久自解踏著他關振了、倏然悟時、聖賢格言自是句句好。」「周子之書太極圖」(九四・2376)に「周貴卿問、動靜者、所乘之機。曰、機、是關振子。踏著動底機、便挑撥得那靜底。踏著靜底機、便挑撥得那動底。」とある例からも明らかであろう。

「下頭」は「沒頭する」の意。「程子之書一」(九五・2375)に「學者做工夫、須以聖人爲標準、如何却說得不立標準。曰、學者固當以聖人爲師、然亦何須得先立標準。才立標準、心裏便計較思量幾時得到聖人。處聖人田地又如何。便有箇先獲底心。」「顏淵曰、舜何人也。予何人也。有爲者亦若是。」也只是如此平説、教人須以聖賢自期。又何須先立標準。只恁下著頭做、少間自有所至。」とある。なお、この例では、「只認」ではなく「只恁」と作られるが、明成化九年刊本では同じ箇所を「只認下著頭做」と作っていて、より本條に近い形になっている。「認」と「恁」は、そもそも同音であり、字形も近いものであるから、記録の段階で両者がまぎれた可能性もあろう。

「莫要」は「不要」に同じ。

32 天下書儘多在、只恁地讀、幾時得了。須大段用着工夫、無一件是合少得底。而今只是那一般合看過底文字也未看、何況其他。個。

天下に書物はとても多いから、そんな風に読んでいたのでは、いつになってもものにできないぞ。大いに努力すべきであり、ものにせずともよいことなど一つとしてない。ああした読んでおくべき文章すらまだ読んでいないとなると、ほかはいわずもがなだ。〔沈憫〕

（校勘）朝鮮古寫本 合↓今

（注）「少得」は「缺ける」の意。「人物之性氣質之性」（四・七〇）に「然惜其言之不盡、少得一箇氣字耳。」とある。また、「無一件是合少得底」という主張は以下の例にも表明されており、この語の理解の上でも参考となろう。「訓門人五」（一一七・三〇一）に「讀書理會一件了、又一件。不止是讀書、如遇一件事、且就這事上思量合當如何做、處得來當、方理會別一件。書不可只就皮膚上看、事亦不可只就皮膚上理會。天下無書不是合讀底、無事不是合做底。」

「儘多」は「很多」に同じ。また「在」は「存在する」の意でも解し得るが、「若有人推演出來、其爲害更大在」（「釋氏」一一六・三〇一）のように現代語の「呢」に近い義に考えた。

朱子語類讀書法篇譯注（一）（興膳・木津・齋藤）

33 讀書須徧布周滿。某嘗以爲寧詳母略、寧下母高、寧拙母巧、寧近母遠。方子。

讀書は、餘すところなく周到に讀まねばならない。私はいつも、おおざっぱよりは詳細に、高いよりは低く、巧みであるよりは拙く、遠いよりは近く讀むのがよいと考えている。〔李方子〕

（注）類似的言は、「訓門人四」（一一六・二七〇）に廖謙への訓語として以下のように記録される。「德之看文字尖新、如見得一路光明、便射從此一路去。然爲學讀書、寧詳母略、寧近母遠、寧下母高、寧拙母巧。若一向罩過、不加子細、便看書也不分曉。然人資質亦不同、有愛趨高者、亦有好務詳者。雖皆有得、然詳者終是看得溥博浹洽。」また、『朱子讀書法』二「虚心涵泳」に「問大學、先生曰、讀書須周匝遍滿、某舊時有四句云、寧詳母略、寧下母高、寧拙母巧、寧近母遠」とあるのも参考になる。

34 讀書之法、先要熟讀。須是正看背看、左看右看。看得是了、未可便說道是、更須反覆玩味。時舉。

讀書の法は、まず熟讀することが肝要だ。前から後ろから、左から右から讀むこと。讀んでなるほどと思っても、早合點してはならない。さらに繰り返し味わうべきである。



〔潘時舉〕

(注) この條以後しばらくは熟讀の心得が説かれる。これらは「反覆玩味」「反覆體驗」などのタームで特徴づけることが可能である。

35 少看熟讀、反覆體驗、不必想像計獲。只此三事、守之有常。變孫。

少しの量を熟讀し、繰り返し身をもって確かめ、うまいことやろうと考えてはいけない。この三點は常を守るように。〔變孫〕

(注) 「計獲」は「總論爲學之方」(八・136)に「學者須是直前做去、莫起計獲之心。」とあり、また「論語一四 雍也篇三」(三二・88)に、「論語」の「任者先難而後獲」に關して「只是我合做底事、便自做將去、更無下面一截。才有計獲之心、便不是了。」とみえる。「效果をもくろむ」ことを表す。

「體驗」は「總論爲學之方」(八・136)に「學者工夫、但思不得其要。若是尋究得這箇道理、自然頭頭有箇着落、貫通浹洽、各有條理。如或不然、則處處窒礙。學者常談、多說持守未得其要、不知持守甚底。說擴充、說體驗、說涵養、皆是探好底言語做箇說話、必有實得力處方可。所謂要於本領上理會者、蓋緣如此。」とあることからわかるように、これまでもしばしば

見られた、「貫通」「浹洽」「涵養」などのタームと縁語の關係にある。その含義は、朱子自身が「訓門人七」(一一九・289)で、「講論自是講論、須是將來自體驗。……體驗是自心裏暗自講量一次。」のように定義しており、やはりこれらの語と縁語關係にあつて「自論爲學工夫」(一〇四・2616)に「體驗、是把那聽得底自去心裏重複思量過。」と定義される「體驗」と、ほぼ同じ意と理解してよい。

36 凡看文字、少看熟讀、一也。不要鑽研立說、但要反覆體驗、二也。埋頭理會、不要求效、三也。三者、學者當守此。人傑。

およそ文章を読むには、第一に少しの量をじっくりと読むこと。第二に穿鑿して自説を立てようとせず、ただ繰り返し身をもって確かめよ。第三に没頭して取り組み、成果を上げようと思うな。この三點は、學問する者が常に心がけていなければならない。〔萬人傑〕

(注) 前條と同じく、讀書する上での心得を説く。『朱子讀書法』一「綱領」にも、「大凡讀書、少看熟讀、一也。不要煩碎立說、但要反覆體驗、二也。埋頭理會、不要求效、三也。三者、學者當守此」と、本條とほとんど同じ字句が見られる。

37 書宜少看、要極熟。小兒讀書記得、大人多記不得者、只爲小兒心專。一日授一百字、則只是一百字。二百字、則只是二百字。大人一日或看百板、不恁精專。人多看一分之十、今宜看十分之一。寬着期限、緊着課程。淳。

書物は少なく読み、徹底的に身につけるのがよい。子供が本を読んで憶えるのに、大人だと大抵憶えられないのは、子供は心が集中するからである。一日に百字教われれば、ひたすら百字、二百字ならひたすら二百字のみを憶える。大人は一日に百葉讀んでも、それほど集中しない。人はともすれば自分の能力の十倍も讀もうとするが、まずは十分の一を讀むようにしなさい。期限は緩やかに設定し、學習内容を密にしなさい。〔陳淳〕

(注) この條から46條までは、熟讀する上で、欲張らずに内容を濃く設定することの重要性を述べる。同趣旨の言は各所に見られるが、ここでは、「總論爲學之方」(八・1180)の「嚴立功程、寬着意思、久之、自當有味、不可求欲速之功」を擧げておく。

また、本條とほとんど同じ文章が、『朱子讀書法』三「熟讀精思」に見られる。ただし、「人多看一分之十、今宜看十分之一」を「人多看一分之十、今且看十分之二」と作る。

朱子語類讀書法篇譯注(一)(興膳・木津・齋藤)

38 讀書、只逐段逐些子細理會。小兒讀書所以記得、是渠不識後面字、只專讀一進耳。今人讀書、只袞袞讀去。假饒讀得十遍、是讀得十遍不曾理會得底書耳。得寸、則王之寸也。得尺、則王之尺也。讀書當如此。璚。

讀書は、とにかく一段ごとに少しづつきめ細かく取り組むことだ。子供が書物を読んでそれを覚えられるのは、その後の文章を氣にせずに、ひたすら讀み進むからである。今の人の讀書は、どんどん讀むだけだ。(そんなことでは)かりに十遍讀んだところで、ちっともものにならぬまま十遍讀んだに過ぎないのである。「寸を得れば則ち王の寸なり、尺を得れば則ち王の尺なり」というが、讀書もかくあるべきだ。〔璚〕

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

(注) 「假饒」は「假如」に同じ。

「逐些」は「少しづつ」の意。「逐一些」という形も見られる。「公今須是逐一些子細理會、始得、不可如此鹵莽。」(訓門人四)一六・2803)

「袞袞」は、無頓着にどんどん進む様子を形容し、第22條に見られた「猛袞」とはまた異なるニュアンスを傳える。本條と同様の例としては、「訓門人九」(一一一・2813)の「在家袞袞、

但不敢忘書冊、亦覺未免間斷。」が擧げられよう。

「得寸、則王之寸也。得尺、則王之尺也」は『戰國策』秦三の一節。（范雎謂秦王）曰、大王越韓魏而攻強齊、非計也。

……王不如遠交而近攻。得寸、則王之寸也。得尺、亦王之尺也。今舍此而遠攻、不亦繆乎。」

（記錄者） 滕璘（一一四五？～一二二九） 字は德粹、號は溪齋、徽州婺源の人。「師事年攷」197。

39 讀書小作課程、大施功力。如會讀得二百字、只讀得一

百字、却於百字中猛施工夫、理會子細、讀誦教熟。如此、不會記性人自記得、無識性人亦理會得。若泛泛然念多、只是皆無益耳。讀書、不可以兼看未讀者、却當兼看已讀者。璘。

讀書では、學習計畫は小さく立て、そこに大きな努力をかけること。もしも二百字讀めるのなら、百字だけ讀むようにして、その百字について猛然と努力して、きめ細かく取り組み、口に出して十分憶えこむようにするのだ。こうすれば、記憶力の悪い人でも自然と憶えられるし、ものわりの悪い人でもものにできる。漫然とたくさん讀んでも無益なだけだ。讀書するとき、まだ讀んだことのない書を併せて讀むのはよくない。すでに讀んだ書を併せ讀むべき

だ。〔滕璘〕

（校勘） 朝鮮古寫本 缺

（注） 前條に引き續き、緊密な讀書の重要性を説く條。「總論爲學之方」（八・138）にも「小立課程、大作工夫」とある。

「泛泛」は「ぼんやりとして書物に集中していない様子」を形容する。たとえば、「持守」（二二・207）に「道夫曰、泛泛於文字間、祇覺得異、實下工、則貫通之理始見。曰、然。」「訓門人八」（二〇・283）に「要他底、須著些精彩方得、然泛泛做又不得。」とある。

朱子は、讀書する際の口に出して讀む效果についてしばしば言及しているが、本條もその一つである（第60條・61條、また「讀書法下」105條を参照）。「泛泛然」の後に續く「念」も單に「讀む」のではなく、この場合は明らかに「口に出して讀む」ことを示す動詞である。一般に『語類』では、「看」と「念」とを、「目で讀む」と「口に出して讀む」とに使い分けている。

40 讀書不可貪多、且要精熟。如今日看得一板、且看半板、將那精力來更看前半板、兩邊如此、方看得熟。直須看得古人意思出、方好。洽。

讀書は欲張ってはいけない。まずは精讀熟讀することだ。もし日に一葉讀めるのなら、まず半葉だけを讀むこと。

(二葉讀める)その精力で前半葉だけを讀み、兩面ともこのように精讀してこそじっくり理解できるのである。古人の考えが明らかになるように讀んでこそよい。〔張治〕

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

(記錄者) 張治(一一六一—一二三七) 字は元德、臨江軍清江縣の人。〔師事年攷續〕300。

41 讀書不要貪多。向見州郡納稅、數萬鈔總作一結。忽錯其數、更無推尋處。其後有一某官乃立法、三二十鈔作一結。觀此、則讀書之法可見。可學。

讀書は欲張ってはいけない。以前州郡の納稅の狀況を見たことがあるが、數萬鈔で一まとめにしていた。これではうっかり數を間違つても、まったく確かめようがない。その後ある役人が規則を立てて、三二十鈔ずつまとめるようにした。これを見れば、讀書の法も分かるだろう。〔鄭可學〕

(注) 「鈔」は、宋代では「鈔引」で「手形」や「證文」の類を表し、それが價值をもつて鹽や茶などと引き替えることができた。「鈔」は一見紙幣の意味にもとれそうだが、紙幣は別に「會子」と呼ばれていて、この場合の「鈔」が表すものをそのまま「紙幣」と譯すには問題があろう。ここでは量詞としての

朱子語類讀書法篇譯注(一)(興膳・木津・齊藤)

役割を重視して、上記のように譯出した。

(記錄者) 鄭可學(一一五二—一二二二) 字は子上、持齋先生と呼ばれる。興化軍莆田縣の人。〔師事年攷〕201。

42 讀書不可貪多、常使自家力量有餘。正淳云、欲將諸書循環看。曰、不可如此、須看得一書徹了、方再看一書。若雜然竝進、却反爲所困。如射弓、有五斗力、且用四斗弓便可拽滿、己力欺得他過。今學者不付自己力量去觀書、恐自家照管他不過。營。

「讀書は欲張ってはいけない。常に自分の力に餘裕を持たせておかねばならない。」(と先生がおっしゃったので)正淳(萬人傑)が尋ねた、「いろんな書物を循環させて讀もうと思います。」おっしゃるには、「それはいけない、一冊の書物を徹底的に讀みこんでから、次の書を読むのだ。ごちゃごちゃと同時に何冊も讀んで行けば、行き詰まってしまう。たとえば弓を射るのに、五斗の弓を引く力があるのなら、まずは四斗の弓を用いれば、存分に引きしほれて、使いこなすことができるのである。今の學問をする者は、自

分の力を見定めずに書物を読むので、自分で書物を扱いかねているのだろう。」「黄登」

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

朝鮮古活字本 己↓已 他↓它

(注) 「循環看」とは、「訓門人五」(一一七・2823)に「大學・論語・孟子・中庸四書、自依次序循環看。」とあるように、何冊かの書物を順番に繰り返し読む讀書法をさす。しかし、この讀書法を實行できるのは、「自論爲學工夫」(一〇四・2653)に「器之云、如今將先生數書循環看去。曰、都讀得了、方可循環再看。」とあることからわかるように、習熟すべき書物をすでに讀んで會得した者だけであり、この條では、恐らくはまだそのレヴェルに達していない學生に向かつて、まず先に爲すべきことを朱子が諭しているものと考えられる。

「欺得〱過」は、本來「あなどる」の意だが、ここでは、「〱の上に立つ」の意で用いられる。『語類』の中では、「論語一七 泰伯篇」(三五・938)の「獨有自家會、別人都不會、自家便驕得他、便欺得他。」や、「春秋經」(八三・2171)の「如蘭相如」(請)秦王擊缶、亦是秦常欺得趙過、忽然被一箇人恁地硬扳、他如何不動。」などのように用いられる。「照管」は「制御する」「管理する」「心がける」などの意。たとえば、「持守」(一一・283)に「存得此心、便是要在這裏常常照管。若不照管、存養要做甚麼用。」とあるように用いられる。

43 讀書、只恁逐段子細看、積累去、則一生讀多少書。若務貪多、則反不會讀得。又曰、須是緊着工夫、不可悠悠、又不須忙。只常抖搜得此心醒、則看愈有力。道夫。

「讀書は、とにかく段ごとに詳しく讀むこと。積み重ねていけば、一生にかなりの本が讀めるだろう。もし欲張って多く讀もうとすれば、かえって讀めない。」また言われた、「集中して努力しなさい。漫然と讀むのではないし、慌ててもいけない。ひたすらいつも氣合いを入れて心が醒めているようにすれば、讀めば讀むほど力がつくものだ。」「楊道夫」

(校勘) 朝鮮古寫本・古活字本 只常抖搜↓只常抖擻

(注) 「今語學問、正如煮物相似、須熱猛火先煮、方用微火慢煮。若一向只用微火、何由得熟。欲復元來之性、乃恁地悠悠、幾時會做得得。」(總論爲學之方)八・136)、「悠悠於學者最有病」(訓門人一)一・111・2750)・「學者悠悠是大病」(訓門人九)一・111・2823)という風に、だから學問をすることを戒める語は隨所に見られるが、特に、以下に引く「訓門人九」(一一・2823)の條では、朱子の弟子への怒りが爆發しており興味深い。「公皆如此悠悠、終不濟事。今朋友著力理會文字、一日有一日工夫、然尙恐其理會得零碎、不見得周匝。若如諸公

悠悠、是要如何。光陰易過、一日減一日、一歲無一歲、只見老大。忽然死著、思量來這是甚則劇、恁地悠悠過了。」

「抖擻」は「奮い起こす」の意。以下は「抖擻」に作るものの、同趣旨での用例である。「爲學有用精神處、有借精神處、有合著工夫處。要之、人精神有得亦不多、自家將來枉用了、亦可惜。……直須抖擻精神、莫要昏鈍。如救火治病、豈可悠悠歲月。」（訓門人七）一一九・2874）「……如人瞌睡、方其睡時、固無所覺、莫教纔醒、便抖擻起精神、莫要更教他睡、此便是醒。」（大學四 或問上 經一章）一七・377）など。

44 不可都要衰去、如人一日只喫得三碗飯、不可將十數日飯都一齊喫了。一日只看得幾段、做得多少工夫、亦有限。不可衰去都要了。淳。

一度に何もかもやろうとしてはいけない。たとえば人は一日三膳ご飯は食べられても、十數日分のご飯を一度に食べることはできないようなものだ。一日には數段しか讀めないのだから、どんなに精力を注ぎこんでも限りがある。一度に全部やろうとしてはいけない。〔陳淳〕

（校勘）朝鮮古寫本 不可都要衰去↓不可都衰去 三碗飯↓三碗飯 十數日飯↓十數日入飯

朱子語類讀書法篇譯注（一）（興膳・木津・齋藤）

（注）「衰」はこれまでもさまざまなニュアンスで登場した語であるが、ここでは、欲張って一切合切無反省に盛り込もうとする學問の仕方の説明のために用いられている。『語類』の他の箇所での似通った用例は、「陸氏」（一二四・2870）に、陸象山への評語として次のように見える。なお、この例では「滾」に作るが、意味は同じである。「先生問、子靜（象山の號）多說甚話。曰、却如時文相似、只連片滾將去。曰、所說者何。曰、他只說『天地之性人爲貴』、人爲萬物之靈。人所以貴與靈者、只是這心。其說雖許多、只恁滾去。」

また、この條の「三碗飯」という比喻によく似た例が、「訓門人六」（一一八・2862）に、やはり「讀書は一つ一つじっくり取り組まねばならない」という主張に續いて、次のように見える。「如喫飯、不成一日都要喫得盡。須與分做三頓喫、只恁地頓頓喫去、知一生喫了多少飯。讀書亦如此。」

45 讀書、只看一箇冊子、毎日只讀一段、方始是自家底。若看此又看彼、雖從眼邊過得一遍、終是不熟。履孫。

讀書は、もっぱら一冊の書物を読み、毎日一段ずつ讀んでいってこそ自分のものになる。あれも讀みこれも讀みでは、目の前を通り過ぎるだけで、結局習熟できない。〔潘履孫〕

（校勘）朝鮮古寫本・古活字本 一箇冊子↓一箇冊子

〔記錄者〕 潘履孫 字は坦翁、金華の人か。「師事年攷續」280。

46 今人讀書、看未到這裏、心已在後面。纔看到這裏、便欲舍去了。如此、只是不求自家曉解。須是徘徊顧戀、如不欲去、方會認得。至。

今の人の讀書は、まだそこまで讀まぬうちに、心はすでに先に行っている。そこまで讀んだと思つたら、もうすぐに捨て去ろうとする。このように、まったく自分から理解しようとしていないのだ。行きつ戻りつ振り返り、離れた

くないようになってこそ、わかるのだ。〔楊至〕

〔校勘〕 朝鮮古寫本 纔↓才 便欲舍去了↓便欲捨去 「如不欲去」以下を「不欲捨去、方能體認得、又曰、讀書者譬如觀此屋、若在外面見有此屋、便謂見了、即無緣識得。須是入去裏面逐一、看、道是。幾多問架、幾多窓櫺、看一遍了、又重重看過、一齊記得、方是。」に作る。

〔注〕 「認得」は「會得する」の意。「訓門人四」(二一六・226)に「讀書、且去鑽研求索。及反覆認得時、且蒙頭去做、久久須有功效。」とある。

〔附記〕 校正の段階で、田中謙二氏から種々貴重な教示を賜わった。記して深謝の意を表する。